

シモナ・チェルツィ「ミクロストリアー社会関係 vs 文化モデル」

Simona Cerutti, “Microhistory: Social Relations versus Cultural Models”, in Anna-Maija Castrén, Markku Lonkila, and Matti Peltonen (eds.), *Between sociology and history: essays on microhistory, collective action, and nation-building*, Finnish Literature Society, 2004, pp. 17-40.

紹介

イタリアのミクロストリアには「文化的」アプローチと「社会的」アプローチという異なる二つの方向性があった。こうした従来のラベルを批判し、社会的ミクロストリアの延長線上に両者を橋渡しする新たなミクロストリアを構築しようとした論文。

○導入部(pp. 17-19)

- ・1990年代に、多くの論者がイタリアのミクロストリアに「社会的」アプローチと「文化的」アプローチ¹という二つの方向性があることを指摘していた。研究対象の社会的コンテクスト化(social contextualisation)に関心を持つ歴史家と、研究対象を文化的コンテクストに組み込むことに関心を持つ歴史家がいた。
- ・「社会的」潮流の立役者の一人であるエドアルド・グレンディによれば、この二つの方向性が存在することは、その境界がしばしば揺らぎ不明瞭であったけれども、当初から明確であったという²。
- ・この二つの方向性の存在を明確にし、徹底的に考察できなかったことが、ミクロストリアを外から眺める人びとに多くの誤解を生んでしまった。例えば、ジャック・ルヴェル編『スケールの戯れ』³に、「社会的」ミクロストリアの代表的研究者が多く参加し、「文化的」ミクロストリアの代表的研究者が一人も参加していないのはいくぶん逆説的だった。というのも、大きなスケールと小さなスケールの交錯が必要だという考え方のもとで、「スケールの問題」についての考察を促したのは、実は「文化的」ミクロストリアだったからである。これに対して、「社会的」ミクロストリアは、「マイクロ」スケールこそがさまざまな大きさの現象を分析できるレベルであると主張していた⁴。
- ・本稿では、1. 文化分析と社会分析の関係性について、2. 両者がしばしば競合すると

¹ 「文化的アプローチと言われているのは、カルロ・ギンズブルグが『夜の合戦』、『チーズとうじ虫』、『闇の歴史』などで実践したアプローチのことである。」

² Edoardo Grendi, “Ripensare la microstoria?”, *Quaderni storici*, 29-2, 1994, pp. 539-49.

³ Jacques Revel (ed.), *Jeux d'échelles: la micro-analyse à l'expérience*, Gallimard: Seuil, 1996.

⁴ Paul-André Rosental, “Construire le ‘macro’ par le ‘micro’: Fredrik Barth et la microstoria”, in Jacques Revel (ed.), *Jeux d'échelles: la micro-analyse à l'expérience*, Gallimard: Seuil, 1996, pp. 141-159. 歴史学文献レビュー②⑩を参照。

見られてきた理由について、3. そして現在、こうした二つの関心に新たな収束が見られる理由について考察する。近年、「社会的」ミクロストリアの歴史家は、文化的コンテキスト化が必要であると感じているようであり、その傾向は思想史への新たな関心に表れている。特に本稿で扱われるのは以下のような事柄である。

- ①社会的コンテキスト化と文化的コンテキスト化の対立の背後にある前提を簡潔に分析すること。
- ②「社会的」アプローチを特徴付けていると思われるいくつかの制限について強調すること。これらの制限は要するに、行為(action)の意味に関する還元的な理解の仕方と、歴史資料に関して十分に考えぬかれていない見解のことである。この二つの側面が、文化的コンテキスト化を新たに要求する道を開いていることを示す。
- ③文化的コンテキスト化が要求する分析手続きに関していくつかのコメントを述べること。このことはカルロ・ギンズブルグ批判へとつながる。文化モデルの分析を行動(behaviour)の分析から切り離すのではなく、両者を一緒にすることで深い（そして秘められた）意味をもっとよく分析できることを示す。

○ミクロストリアの「社会的」解釈と「文化的」解釈(pp. 20-22)

- ・ミクロストリアにおける社会的コンテキスト化と文化的コンテキスト化の違いは、分析を行う関心の違いを反映しているわけではない。両者とも同じ目的を追求していた。研究対象を「ミクロ」スケールに限定し、歴史のプロセスの個別の主人公たちを慎重に探し出すという選択をしたのは、既成の歴史学の常識に含まれる傲慢さに対する応答としてであった。
- ・両者に不一致が生じたのは、個別の行為者の意味をどのように再構築すべきか、また、行為者が追求した目的に歴史家がどのように到達するのが最善であるかについてであった。まず、「社会的」アプローチから説明していく。
- ・「社会的」ミクロストリアの歴史家の見解では、個人の軌跡を再構築することは、適切なコンテキスト分析からカテゴリーとクロノロジーを再構築するという野心全体の一部であった。したがって、これは全体史という概念の一部であり、そこでは行動と文化モデルが別々の専門家の領域に分かれていなかった。個人の歩みを辿り、個人の社会関係や政治的、経済的、社会的な戦略を分析することで問われていたのは、社会的コンテキストと文化的コンテキストを「共に」(together)記述することだったのである。
- ・ミクロストリアの基本的な野心のひとつは、「定説となった歴史の常識」から生じるアナクロニズムや、社会科学から無反省的に引き継がれたカテゴリーの危険な誘惑から逃れることであった。そのためには、何に関連しているのかという先入観に固執することなしに、「関連する」コンテキストを構築する必要があった。
- ・行動と文化の間に非常に密接なつながりがあるという問題に関して、「社会的」ミクロ

ストリアの歴史家は、カルロ・ギンズブルグが民衆文化を分析する方法を批判した。というのも、ギンズブルグによるメノッキオと「ベナンダンティ」の信仰に関する解釈は、基本的に思想的解釈のレベルで行われていたからである。メノッキオの人生は、彼の複雑なコスモロジーを再構築するために分析がテイクオフする「トランポリン」に過ぎなかった。

- ・したがって、ミクロストリアの「文化学派」と「社会学派」という言い方は不正確なように思われる。両者の違いは学問的関心の差であるというよりも、むしろ文化モデルを分析するためのコンテキストを提示するという目的全体の中で、行動や社会関係に与えられる地位をめぐる分岐なのである。

○コンテキスト化(pp. 22-26)

- ・「社会的」アプローチは、アナクロニズムを避ける適切なコンテキスト化を構築できたのか。そうしたコンテキスト化は、社会関係と文化モデルとの間に真の結びつきを作り出したのか。文化を考慮する上でハイカルチャーを含めることができるのか、それともこれは社会行動の分析の外部にあるものと見なされているのか。
- ・こうした問題についての議論は、ミクロストリアの歴史家の間だけでなく、もっと広く社会史家の間でも行われた。たとえば、20 世紀のもっとも重要な歴史家の一人、E. P. トムスンである。彼のアプローチは、社会的行為の意味について還元的な理解の仕方をしていて限界があった。トムスンが注目する民衆の行為は、客観的な権力構造の表出であり、社会構造によって決定される経験を共有するものと考えられていた。行為は構造から派生し構造に還元されてしまう。したがって、トムスンの推論のコンテキストは厳密に社会的なものであり、考慮されている文化は専ら民衆文化のみであった。
- ・それに対してミクロストリアにおいては、外的に定義された階級や集団に人びとが所属していることを自動的に受け入れないということが、エゴ中心的な分析を行い、人びとの伝記を辿る理由の一つとなった。
- ・しかしながら、アナクロニズムに陥っていない真に適切なカテゴリーを作り出すというミクロストリアの試みは部分的にしか達成されなかった。トムスンの場合と同じように、ミクロストリアの分析で考慮されるコンテキストは、ある意味ではまだ「外的」であり、行為者の経験を把握するためには不十分だった。研究対象となっている個人の伝記を再構築するという方法自体が、「内的」な説明を与えてくれるという保証にはなかったのである。
- ・そうした再構築は「戦略」という概念を用いて行われており、この語には合理性や行動の最大化といった意味合いがともなっていた。近年、ミクロストリアの歴史家がこの概念のアナクロニズム的な影響をしばしば指摘している。つまり、「戦略」という概念は、「行為者から見て」適切なコンテキストを探るために導入された方法論的ツールであ

ったにもかかわらず、同時代の心性にとっておそらく全く異質な意味に染まっていたのである。

- ・戦略という概念は、行為者自身による「事実についての見解」の外部にある、それよりも優れた平面に歴史家の分析を位置づけることを促している。また、このアプローチの前提は行為者が社会規範を操作することであるため、「戦略的行為」という概念的枠組みによって行為の一般的方向性がすでに条件づけられてしまっている。このことが意味しているのは、行為と規範の間に生じる矛盾が期待され、そこに注意が向けられるということである。結果として、規範と行動、文化と行為は、異なる地平に位置づけられてしまう。

○規範と実践(pp. 26-31)

- ・著者が、行為者自身の言葉と論理に基づく「内的」でイーミック⁵な分析とは何かということを考えるきっかけになったのは、この戦略という概念、それが前提とする最大化という考え方、この語が作り出す研究者と研究対象との関係性に対する不満であった。
- ・著者は研究を進めていくうちに、分析単位についての新しい概念に辿り着いた。それが行動(behaviour)、諸個人の行為(actions of individuals)である。
- ・行為とは社会的構築物(social edifices)、理屈、論理、規範を作る手段であり、同時に、こうした構築物、理屈、論理形式、規範を正当化する瞬間でもある。また、行為には物事を変化させる可能性や、立場を正当化する可能な方法についての解釈も含まれている。このように考えると、実践と規範の関係性は大きく変化する。
- ・行為にこのような創造的性格を認めるのであれば、社会構造と行為と文化を機械的に関連付けることはできない。たとえば、アンシアン・レジームの法文化について考えてみるならば、多くの場合、正当化システム（自然法か実定法）のいずれに依拠するかを決定するのは、その人の社会的条件というよりも、その人が占める特定の位置であった。つまり、見出されるのは特定の法文化と特定の社会層との間の対応関係ではなく、目的を共有することで集まった諸個人である。たとえば、18世紀のラツィオ地方の農民は、消費者として行為するときにはモラル・エコノミーや自然法の言語を利用し、売り手として行為するときには利益の言語を使い得たのである。
- ・著者が主張するアプローチは、研究対象に対して研究者が持つ権威と距離という点で、従来の「社会的」ミクロストリアの歴史家とは異なっている。分析において問われてい

⁵ 「イーミック」と「エティック」という区別は、言語学者ケネス・パイクが phonemics と phonetic という単語の接尾辞から作ったもので、人類学の議論においては二つの異なる分析戦略を意味している。イーミックのアプローチは行為者のカテゴリーと言語に基づいており、エティックのアプローチは研究者のカテゴリーに基づいている。

るのは、行為者による事実についての見解を修正することでもなければ、彼らがおそらくは気づいていなかった現実(彼らの行為を決定する客観的束縛)を行為者に明らかにしてあげることもない。問われているのは彼らの行為や主張を理解可能、容認可能、正当なものにすることである。「人びとを真剣に受け止めること」(人びとの行為や意図を分析において考慮すること)が問題となる。これがイーミックな視点の意味するところである。

- ・このような観点から多くの社会史家が、これまでほとんど関心を示さなかった文化的・思想的次元に新たな関心を持つようになった。行為者が自らの主張、提案、行為を正当化するためには、社会的な知識や解釈を用いる必要がある(また、物質的・文化的資源を操作する必要がある)。したがって、この観点のもとでは、図書館はもはや社会史家が個人的な勉強のために利用する資源ではない。それは、戦略、モノ、経済的選択、結婚の選択などとともに、社会分析の構成要素となる。社会史家と思想史家は連携する必要があるのである。

○行為者の視点(pp. 31-34)

- ・文化的ミクロストリアの代表者であるギンズブルグは、自らの分析方法を一貫して追求してきた。以下では、彼の最近の著作のいくつかの前提を分析する。文化分析と社会分析という単純な区別は、ミクロストリアの分析方法の違いを説明するには全く不適切である。この違いは、研究者が研究対象との間に築く関係、すなわち研究者の権威の場と、分析カテゴリーを導き出す場とに関わるものである。言い換えれば、この問題はイーミックな分析とエティックな分析の関係性の問題である。イーミックとエティックは二つの分析手続きなのか、それとも二つのコンテキストなのか？
- ・イーミックとエティックは分析のコンテキストであるという考え方が、ギンズブルグの研究の多くで用いられた分析手続きの根底にあると考えられる。ギンズブルグの研究は、次の三つの前提の周りで非常に一貫して展開されている。
 - ①いかなる社会現象を理解する場合にも、分析すべき多くのコンテキストが存在する。
なぜなら、あらゆる研究対象はさまざまな層を含んでおり、さまざまな深さのクロノロジーに根ざした多くの要素で構成されているからである。
 - ②こうしたさまざまなクロノロジーを探究する作業は、生きられた「経験」を再構築するという仕事のために役立つ。ギンズブルグにとって、この生きられた経験は「意識的な経験、あるいは文書に痕跡を残している経験を意味しない」ので、非意識的な次元を考慮に入れなければならない。
 - ③異なるスケールの間を移動し、分析の焦点を変えることによって、行為者が気づいていなかったがそれでも彼らの経験を構成していた要素との関係を確立することを可能にする臨界距離(critical distance)を獲得することが必要である。

- ・これら三つの重要なポイントが、ギンズブルグの研究において、文書からその文書を分析するための適切なコンテキストを漸進的に特定していく「文書の連鎖」を構成する。
- ・この適切なコンテキストの特定は、同心円的と呼ぶべき仕方で進行する。つまり、行為者が問題となっている現象に与えている意味から出発し、彼らの意識的な理解を逃れたもっとも遠い思いがけない意味へと徐々に進み、それらは比較によって構築されるのである。最後の層こそがもっとも重要な層であると見なされ、行為や信念の究極的な意味がこの層にあると暗に示されている。
- ・この方法は、最終的には、「異化作用」(spaesamento)を利用することで、意識（行為者の意識、研究者の意識、そしてこの発見の経験を共有するよう求められる読者の意識）とは完全に無縁な意味体系やコンテキストに直面したときの驚きの感覚を機能させる。

○距離を取ることと比較すること(pp. 34-35)

- ・この分析方法に対する著者の不満は、距離を置くという操作に十分明確な規則や手続きが与えられていないことである。これは、分析の手続きと、文書の連鎖とは何なのかという理解の両方に関する問題である。
- ・コンテキスト化の第一のサイクルが完了してしまうと、行為や信念は完全に研究者の知識によって関連性が決められた文化的コンテキストに位置づけられることになる。研究対象には（直接的なコンテキストを分析する最初の段階が終わってしまえば）、研究者の行き先を縛ったり、研究者の選択にチェックを加えたりするものは何もない。そのため、たとえば、キッチナー卿が 1914 年に英国の青年に入隊を勧めた有名なポスターから、ミネルヴァとアレクサンドロス大王の表象に関する大プリニウスの『博物誌』の一節への移行は、完全に著者ギンズブルグによって決められる経路を辿るのである⁶。
- ・予期せぬ接続と類似点を「明らかに」するパズルのピースは、すべて著者がフィールドに持ち込み選択したものである。研究対象は著者を停止させることはできないし、著者に反論することもできない。同じことは読者についても言える。
- ・このような議論の進め方で怪しく思われるのは、研究者が次第に研究対象から遠ざかっていくことでもなければ、比較（エティックと呼ぶべき次元）を用いることでもない。疑わしく思われるのは、コンテキスト分析や社会分析という還元的な考え方である。
- ・こうした分析は、行為者によるイメージや信念の利用を発見するためにのみ適切であると考えられている。他方で、イメージや信念の「本来の性質」の問題は脇に置かれてしまい、文化的人工物の実際の分析は、場所や時代などの点で行為者を越えた地平で行われている。
- ・しかし、研究者がアーカイブ史料において、他ではなくある特定のイメージ、特定の信

⁶ Carlo Ginzburg, “‘Your Country Needs You’: a Case Study in Political Iconography”, *History Workshop Journal*, 2001, pp. 1-22.

念が、なぜ私たちにまで伝達されたのかを決定づけることになる行為者の選択に焦点を当てるならば、解釈学的な意味合いに満ちた分離、驚異、「方向感覚の喪失」の瞬間は、直接的なコンテキストと同じレベルで起こりうるのである。行為者によって行われるこの選択は、問題となっている文化的伝統を変容させるものである。

- ・ 著者が提案するアプローチは、「行為者の驚きを考慮する」ことを意味している。つまり、文化的伝統の中から選択し選別するという活動が、ある伝統が生き残って別の伝統が減びることを可能にするのである。この選択活動は、「コントロールされた」文化的コンテキストを辿ることになる。関連性が研究者だけによって決まるのではなく、行為者によって辿られた軌跡によって決まるという意味で、コントロールされているのである。
- ・ この種のアプローチから生じる文書の連鎖は、同心円的でも遠心的でもない（つまり、行為者から出発し、研究者の能力の場に依存した経路を辿ってどんどん離れていくのではない）。文書の連鎖は、行為者が問題になっている伝統、テキスト、信念と築いた関係性に基づいて構築されるのである。その理由は、文化は単に受け継がれるものではないからである。それはまた、継続的な創造の問題である。言い換えれば、著者の念頭にある連鎖は、行為者の視点から構築されたイーミックなものである。イーミックは分析の方法であって、行動の直接的なコンテキストではない。この点こそが、社会的、文化的といったラベルを貼られた分析を区分するもっとも重要な違いであると思われる。

○位置づけられた文化(pp. 36-38)

- ・ 分析方法は、可能な解釈をコントロールするための手続きでもある。コンテキストの探索に制限を課すことには二つの重要な利点がある。
 - ① 分析に自ら制限を課してしまいがちな論理的循環を断ち切ることである。隠された意味を「明らかにする」という手続きは、行為者が自身の経験の根の深さに気づいていないことを前提にしている。この無知は研究者によって想定されるものであり、そのことを検証したり反証したりする方法はないので、研究者は行為者によって行われる創造的な選択の作業を辿ろうとはしない。しかし、この想定された無知は私たちの過去が記憶や意図を超えた外側で作用しているという予測まみれの考え方の基礎となっている。
 - ② 特定の時代と場所で生み出された新しい対象を歴史家が発見できるようになることである。その結果、古代であろうと近代であろうと、どんなテキストにも書かれていないような、その生成が行為と正当化、文化と行動、頭脳と胃袋の関係性を理解することで理解可能となるような思想的伝統を発見できるようになる。これは、行為者が知りえないと思われていることを明らかにして行為者を「驚かせる」のではなく、「驚かせられる」可能性の問題である。

- ・著者は最近、文化的伝統を創り出している事例と出会った。アンシアン・レジームにおいて多くの裁判所で採用されていた略式手続きは、比較的安価でとりわけ非公式なものであった。この手続きは、弁護士の立会いを必要とせず、完全に紛争当事者の弁論に基づくものであった。紛争当事者たちの主張は、販売、購入、借金といった行為について詳しく説明することによっておこなわれた。こうした行為の正当性は、何らかの規則に則っているかどうかではなく、むしろ「いかなる争いもない」一般的な合意のもとで行われたという事実に基づいていたのである。
- ・これは社会的実践を法源そのものとして正統化する手続きであった。これは超ローカルの法の形態であり、商人やその他の旅人（未亡人や未成年者のような社会的弱者も）が、（法律や慣習法に関するローカルな知識ではなく）彼らの単純な行為に認められた正当性に基づいて、公正な判決を受けることを可能にした。こうした手続きは、自然的正義に関するスコラ学の見方や、トマス・アクィナスが理論化した「実践理性」に由来しているため古い根をもっている。
- ・こうした法がどのように機能していたのか、さらにもっと一般的に、近世の大半の時期に男女が抱いていた法観念を理解するためには、この伝統に立ち返ることが必要だった。しかしながら、これだけでは不十分だった。この伝統は、行為や司法への要求を正当化する源泉として引き出されたが、この同じ行為や要求が、伝統が再定式、再創造、変容されるコンテキストを構成していたのである。
- ・司法が機能する仕方や訴訟の詳細な分析、紛争当事者の利益の追跡、これらはすべて、文化的伝統の利用だけでなく、それが新たに創造される仕方を理解するために不可欠な作業であった。
- ・実際、この研究素材の顕著な特徴となっているのは、スコラ的な自然的正義が、思想史家にとってはとてもあり得ないと思われる文化的伝統に由来する概念を織り込んでいることである。略式手続きが新たな人気を博したコンテキストは、司法手続きの形式主義に対する批判であり、当時のピエモンテではこの批判が非常に激しかった。こうして、自然法の伝統が、法の形式性や、弁護士や裁判官の過剰な権力とみなされていたもののへの対抗手段として利用された。
- ・同時に、一見相容れない別の伝統も引き合いに出された。ベーコン的な経験主義のアプローチである。このアプローチは、法学の分野では、法学の教義のア・プリオリな前提を否定し、個別の訴訟の特徴を経験的に調査することを重視するという形で表れた。こうして、予想もできないような形で、スコラ学とベーコン的な経験主義が共存していることが見出され、思想史のどんな本も想像しなかったような「文化的伝統」を作り上げていたのである。
- ・個別の政治的、社会的コンテキストが（つまり、多くの人びとが裁判所で自分の主張を提示し、仲裁手続きによって紛争を解決したいと願い、さらに、法律の専門家たちを含

む多くの人びとが正式な法律の手続きと闘っていたことが)、特定の文化的伝統を作り出すことにつながったのである。注意すべきは、このことは既存の資源を操作することではないし、他人が考えたアイデアをある種のブリコラージュのように組み合わせただけの問題でもないということである。行為と正当性を織り交ぜることが、真に独創的な文化形態を生み出したのである。